



Title	朱有燉の「恋愛劇」の教化意味：戯曲『復落娼』『香囊怨』『団円夢』を手掛かりに
Author(s)	温, 彬
Citation	フィロカリア. 2024, 41, p. 29-42
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95653
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

朱有燉の「恋愛劇」の教化意味

—戯曲『復落姐』『香囊怨』『団円夢』を手掛かりに—

温
彬

まえがき

第一節 朱有燉の描かれた「淫婦」像とその性格

第二節 朱有燉の描かれた「節婦」像とその性格

第三節 朱有燉「恋愛劇」の教化意味の再解読
結論と余説

いた作品における人物像を分析していく。

朱有燉は明代前期の代表的な劇作家の一人である。筆者は、以前の研究で、朱有燉の演劇教化観の問題意識は、物欲の遮蔽から人の先天の徳性を解放しようという点にあり、そして演劇が教化機能を果たせるのは、人に道徳知識と道徳感動を与えるためであるという結論に達した^①。しかし、道徳知識であれ、道徳感動であれ、これらは何れも舞台上での具体的な人物を通して表れなければならぬ。そこで、朱有燉は如何なる道徳知識や道徳感動を観客に伝えようとするのかという点を明らかにするために、本論文では、彼が書

は朱有燉の恋愛劇に対し、階級論の立場に立脚し、一方的に批判的な態度を抱えていた。本世紀冒頭から、研究者たちは、朱の恋愛劇が男女の愛や、遊女たちに対する同情という、積極的な面を有していることを指摘しているが、その教化の意味は「女子が夫のために貞節を守る」ことを励ますことにあるという考えは昔と変わらなかつた^③。つまり、朱有燉の恋愛劇の教化意味は「封建貴族出身の朱有燉は統治階級の立場で、女性に貞節を守るという封建倫理の桎梏を加える」ことにある、という階級論的な考えは今までの先行研究

の共通認識である。確かに先行研究に指摘されたように、朱有燉の恋愛劇は客観的に、女性に何らかの悪い影響を及ぼす可能性が存在している⁽⁴⁾。しかしながら、研究の面から言うと、唯一の視点である階級論は一種の先入観として、朱有燉の恋愛劇に対する解説の片面化を招致し、その教化意味を全面的に捉えることができない恐れがある。例えば、もし彼の恋愛劇の教化意味は「女子が夫のために貞節を守る」ことにあると簡単に結論付ければ、朱有燉はなぜ『団円夢』と『香囊怨』という二つの作品に、錢鎖兒と周恭のような「妻のために貞節を守る」男性像も描くのかという問題が解釈できなくなる。そこで、朱有燉の恋愛劇は先行研究の認識より、一層複雑的な教化意味を有していることが考えなければならない。彼の恋愛劇の教化意味を全面的に捉えるために、今までの階級論の枠からはみ出して、新しい視点を見つけなければならない。

また一方、筆者は、朱有燉に描かれた節婦たちの貞節は、往々にして物欲の誘惑に抵抗することによって表現されているという、先行研究にほぼ論じられていない点に気付いた⁽⁵⁾。そこで、朱有燉はなぜこのように節婦を描くだろうかという問題が浮かび上がってきた。これを解明するのは、彼の描かれた節婦像の性格、および恋愛劇の教化意味を捉え直すことに資する。それに加えて、朱有燉の書かれた『曲江池』と『香囊怨』という二つの恋愛劇作品の序において、「人間の本性は善であるが、物欲がこの本性を蔽つたために悪行が生まれた」というような話が繰り返し出ている。本論の第三節にも

論じたように、我々この言葉から、儒学、とりわけ朱子学の理欲觀（天理と人欲の関係性に関する考え方）の深い影響が見える。そこで、儒家の理欲觀は、彼に描かれた節婦像、および恋愛劇の教化意味を理解する重要な視点であると考えなければならない。

以上の説明を踏まえて、本論文は儒学（特に朱子学）の理欲觀を視点として、朱有燉の恋愛劇作品における節婦像の性格と、これらの作品の教化意味を捉え直し、後者が有している儒家工夫論的な意味を指摘することを目的とする。本研究を通して、我々は朱有燉恋愛劇の教化意味が一層深く認識出来ると思われる。

第一節 朱有燉の描かれた「淫婦」像とその性格

ひとまず本節で、朱有燉の『宣平巷劉金兒復落娼』（宣德八年作）『新編甄月娥春風慶朔堂』（永樂四年作）という二つの作品に描かれた、劉金兒と洪葉兒という二人の「不貞の女」、即ち淫婦の人物像を

めぐつて考察を行い、彼女たちはなぜ淫行をしたかという点を解明し、朱有燉の描かれた淫婦像の特質を把握する。これらの淫婦像との対照を通して、我々は朱有燉の節婦像の特徴をさらに確実に把握することができる。

まず『宣平巷劉金兒復落娼』（次は復落娼と称す）のあらすじを紹介する。教坊の遊女である劉金兒は元々樂人の楚五の妻であったが、彼女はいつも貧乏な楚五を軽蔑している。彼女は商人の高兼と知り合った後、すぐに楚五と離れ、高兼と駆け落ちした。このために、楚

五は官庁に告訴した。高兼はそこで劉金児を見捨てて逃げた。この

時、劉金児はもう一人の商人の徐福一と知り合って結婚し、徐の故郷の江西に帰った。しかし、結婚後の劉金児は家事をしたくない。彼女は徐福一と離婚するために、官庁に徐は彼女を強姦してから江西まで誘拐したと、徐を誣告し、徐を入獄させた。その後、地方官は事件の真実を究明し、徐福一を釈放し、劉金児を教坊に戻らせた。

劉金児がどのような淫行をしたかに関して、劇末における色長の判詞における「古い人を送り新しい人を迎えることと、多く利を貪ることで生きる」⁽⁵⁾という言葉によれば、彼女の淫行は「古い人を送り新しい人を迎える」こと、即ち先述べたあらすじのように、最初が楚五の妻であったが、その後は高兼と駆け落ちして結婚し、最後は徐福一と結婚するという、三回の結婚のことである。

ならば、彼女の絶えず再婚の原因はどこにあるだろうか。これは客観的な原因と主観的な心理動機という二点に分けられると考えられる。まず客観的な原因に関して、これは先にあらすじで述べたように、楚五を捨て高兼と結婚するのは、楚五はお金がないことは原因である。そして、高兼から徐福一のところに行つたのは、駆け落ちの件が露見したため、裁判沙汰にならないように高兼に捨てられたためである。最後に徐福一から離れるのは、遊女生活に慣れていたために、家事をやらなければならない人妻生活に適応できないのである。

続いて、劉金児の主観的な心理動機を見ていく。まず、高兼と駆

け落ちの理由について、彼女は自分の妹に、⁽⁷⁾

妹よ、姉の私は今娼家のお手伝いさん（楚五）と一緒に暮らして、貧乏だよ。最近はこつそりとこの医人（高兼）と付き合つて、彼はとてもお金持ちなんだ。だから彼と結婚しようと考へている。

と述べている。彼女が徐福一と結婚する理由も同じである⁽⁸⁾、

今日の祭りで、一群の江西からの商人がいて、とてもお金持ちだつたよ。中には徐福一という人がいて、私の家にお茶飲みに来るつもりだ。この人裏でも外でも優秀だし、もう高客（高兼）は二度と来ないから、いつそこの徐福一と一緒に江西に帰ろうかな。

つまり、心理動機的な面から言うと、彼女が高兼と徐福一と結婚しようとするのは、その二人が「とてもお金持ち」のためである。これのみならず、楚五の所に戻り、近所に「もう送故迎新のことをやめなさい」と勧められた後、彼女は自分が相変わらずこうするつもりだと言つてゐる⁽⁹⁾、

私は堪えない、一生でも堪えない。人に笑われても、見下ろ

されても、私の口巧に頼つて、布（お金）を騙し取るのは簡単だろう。

つまり、彼女が「送故迎新」という不貞の行為、或いは淫行を続けようとするのは、お金の誘惑に堪えないためである。

以上を踏まえ、劉金児の不貞の行為の発生する原因是、客観的な原因（例えば高兼の見捨てと人妻生活の慣れないこと）と、主観的な心理動機、則ちお金への欲望という二点がある。ただし、冒頭に述べた色長の判詞によれば、朱有燉は後者こそは主因だと考えていること

が伺える。

朱有燉が永楽四年（一四〇六年）に書いた『新編甄月娥春風慶朔堂』（次は慶朔堂と称する）における洪葉児も、劉金児と同じく「不貞の女」である。

主人公の范仲淹は地方官として饒州に着任しに来た。友人の柳子安は妓を招き、彼を慶朔堂で接待する。宴席の間、酔っぱらった范仲淹は妓の甄月娥とお互いに気に入り、婚約をした。目を覚ました范仲淹はこれを後悔し、部下の魏介之に甄月娥をお金で釣込ませる。魏介之はお金を出して甄月娥を誘惑しようとするが、彼女に断られ、殴られかける。范は甄月娥の貞操に感動し、付き合い始めた。二年

後、范仲淹は潤州に転任する前に、そこで落ち着いたらすぐに甄月娥を迎えて結婚すると約束した。甄月娥はこのために接客を断り、貧乏を耐えながら范仲淹の手紙を待っていた。半年後、范は魏介之を

通して手紙を送つて、甄月娥を潤州に迎えて結婚した。

洪葉児は甄月娥の友人であり、彼女と共に妓である。先述した劉金児と同じように、洪葉児の不貞も「送故迎新」にある。ただし、劉金児の複数回にわたる再婚と異なり、彼女は同時に一人の男と親密な関係を持っている。彼女は柳子安の恋人でありながら、柳子安のないようにするのだろうか。ひとまず彼女が魏介之と関係を持つてゐる原因を見ていく。¹⁰

甄月娥はほんとにお金稼ぐのは下手だね。魏さんは炭石のような大きな金を彼女に渡したのに断つた。彼女は、見識が狭いね。この金、私はきっともらつてやる。

あらすじに述べたように、魏介之は金で甄月娥を釣込むつもりであるが、彼女に断られた。しかし、洪葉児はこの金を手に入れようと考えている。つまり、彼女が魏介之と親密な関係を持つのは、お金のためである。従つて、彼女と魏介之との密会が主人公の甄月娥に発覚した後、彼女は次のように釈明している¹¹、

姉さんはお金を稼ぐことが下手ですね。諺が言つよう、男は南から来た雁の如く、千匹、が離れたらまた萬匹が来る。彼（柳子安）が離れたので、私が彼を待つ間に、他人と付き合つても

構わないでしょう。

彼女によれば、甄月娥が範仲淹のために貞節を守るのは、「お金を稼ぐことに下手」なことの表れである。逆に言うと、彼女は同時に柳子安と魏介之と親密な関係を持つのは、お金を稼ぐことに上手なことの表れである。つまり、劉金児と同じように、彼女の不貞の行為の心理動機もお金への欲望にある。

以上の劉金児と洪葉児の人物像に対する分析を踏まえ、朱有燉によつて描かれた淫婦たちが、不貞の行為をするのは、お金への欲のためであると言える。つまり、朱有燉の描かれた淫婦たちは、物欲に打ち勝てないことがその重要な特徴である。

第二節 朱有燉の描かれた「節婦」像とその性格

朱有燉の描かれた淫婦像の特徴が明らかになつた上で、本節では、朱有燉の『新編劉盼春守志香囊怨』（次は香囊怨と称する）と『新編趙貞姬身後団円夢』（次は団円夢と称する）という二部の作品を取り上げ、彼の描いた節婦像の特徴を明らかにする。

まずは『香囊怨』のあらすじを紹介する。チンピラの胡子滾は豪商の陸源と書生の周恭を連れて遊郭に遊びに来た。陸源は巨資で妓女の劉盼春の初夜を買おうとするが、彼女に断られた。次の日、周恭はまた遊びに来て、劉盼春とお互に気に入つて結婚した。しかし、胡子滾はこれを周の父に伝え、周は父に禁足させられた。劉盼

春は周と結婚したため、接客をやめたが、陸源は周が禁足させられている間に、またお金を持って劉盼春を買いに来た。陸源と母（劉の母）の脅迫で、劉盼春は最終に自殺する。

あらすじにあるように、豪商の陸源は二回お金を出して、劉盼春を買おうとしている。初めて劉盼春と会つた時、彼は銀の五十両と一対の金釵で、劉盼春の初夜を買うつもりであるが、劉盼春は、

【醉扶帰】あなたは勧誘をやめなさい！私は恥知らずにただ金を求める妓女と違い、次から次へと接客をしない云々。

と、「自分はお金のために送故迎新する淫婦遊女ではない」という理由で、陸源の勧誘を断つた。ここで、お金の誘惑に対し、彼女は第一節で取り上げた劉金児や洪葉児などの淫婦と異なる態度を持っていることが見える。

劉盼春は周恭と結婚した後、周恭の父はこの婚姻に反対し、周恭を禁足させられた。陸源はこれに乘じて、さらに百両の銀を出して二度と劉盼春を勧誘する。しかし、彼はもう一度劉盼春に断られた、¹³

私がこの半年間以来「汚れ」されていないなのに、再婚することは絶対にしない。私の言つてゐる言葉は全く私意がない。

劉金児がお金のために自分の夫を裏切つたことと異なり、劉盼春は

お金の誘惑に対して、心が全く動搖していないために、周恭との夫婦の理が保全し、節婦になつた。これを踏まえると、朱有燉の描かれた劉盼春の貞節と劉金兒の不貞に関して、その分界線はお金への態度であると言える。

ここにまた周恭の表現も留意したい、^{〔14〕}

〔旦云〕周恭、あなたの妻は珍しいぞ。樂人なのに、そこまで貞節を守る。あなたは彼女の恩義を忘れないで。〔末云〕小生は永遠に大姐（劉盼春）の恩義を忘れません。小生はもう終身他人と結婚しないと誓いました。

劉盼春が自殺した後、周恭は生涯結婚しないと誓つた。つまり、劉盼春のみならず、周恭も「貞節」を守ろうとしている。これに関しては次の節で詳しく説明する。

劉盼春と同じように、『団円夢』における女性主人公の趙官保の貞節も、お金の誘惑に対する拒絶によって現れるものである。錢鎖兒と趙官保は親が指腹婚を約束した。二人は成人した後、結婚の直前、仲人はお金持ちの爿舎を趙官保に紹介しようとしたが、彼女に断られた。趙と錢は結婚した後、錢は入隊し、趙は一人で錢の親に奉仕する。この時、仲人はもう一度訪ね、爿舎を薦めるが、また趙官保に断られた。爿舎は諦めず、寒食の時に自ら趙官保を勧誘に来たが、彼女に殴られた。この時、錢鎖兒は屯所で病氣を掛かり、地元の人

は自分の娘を錢の嫁にしようとしたが、錢は固く断つた。このために、面倒を見る人がいなくなつた錢は病死した。錢は死んだ後。爿舎はもう一度仲人に託して、趙官保を勧誘にきた。未亡人になつた趙官保はこれ以上爿舎と母の脅迫を反抗できないために自殺した。神の東岳大帝がこの件を聞いて、錢鎖兒と趙官保をそれぞれを「義仙」と「貞仙」として仙班に列席させた。

趙官保は錢鎖兒と結婚した後、錢鎖兒が外地に兵役を服しに行つた。仲人の王婆はお金持ちの爿舎に託され、趙官保に縁談に行つたが、彼女に断られた、^{〔15〕}

（媒は王婆、旦は趙官保）云々、〔媒云〕姉さん、一言あなたに

勧めていいのか。〔旦云〕王婆さん、言ってください。〔媒云〕あなた今こんなに貧乏だから、なぜ衣装とご飯を得る処や地位高い人を選ばないのか。この町にお金持ち少くないよ、再婚しても構わないだろう。〔旦云〕この王婆、何を言つてゐるか。

〔旦唱〕私貧乏でも文句はない。彼たちはお金持ちでも、私が興味ない。〔媒云〕爿舎という人がいて、美男子だぞ。〔旦唱〕美男子でも私の心は動搖できしない。〔媒云〕彼は金で作った釦があつて、綿羊の肉を食べて、又十数箱の綺麗な服を持っている。あなたはこの婚姻を見逃さないように。〔旦唱〕金で作った釦でも、綿羊の肉でも、十数箱の綺麗な服を持つても、〔鵠踏枝〕私（このような富裕な生活）に似合わなくて、心は少しでも動搖し

ていない。あなたはどう言つても、私は正し理を無くすのは嫌いだ。〔媒云〕あの引舍は官員の家族だから、あなたは彼と結婚すれば、後には夫人（地位高い女性）になるぞ。〔旦唱〕私は夫人になる運がないから、ただ家で姑を奉仕したい。

王婆は趙官保の貧乏な現状に対し、「寧ろお金持ちで、地位の高い引舍と再婚しよう」と勧めている。しかし趙官保は、引舍はいくらお金持ちでも、地位高くて、彼女の心は動かないと答え、王婆の勧誘を断つた。それでも引舍は諦めなく、寒食節に趙官保の墓参りをきっかけに、自ら彼女を勧誘しに来た。^{〔16〕}

（淨は引舍、旦は趙官保）〔淨云〕僕の苗字は引と言います。引舍は即ち僕です。〔旦云〕なるほど、また彼奴か云々、〔淨云〕僕の家には沢山の衣装がありまして、美味しい物がありまして、僕の家はとてもお金持ちですよ。〔旦唱〕私はあなたの持つている衣装に興味なくて、あなたの美味しい物が欲しくなく、あなたの家のお金持ちにも愛しない。

引舍は自ら趙官保を勧誘したが、彼女は変わらずに断られた。趙官保は劉盼春と同じように、お金の誘惑から夫婦の理、あるいは自分の貞節を保全した。

また趙官保の夫の錢鎖児の表現に留意していく、^{〔17〕}

（末は錢鎖児）〔末抱病上、云〕口北に操練しに来てから、知らずに二年半を過ごした。今病気が厳しくて、何太公のおかげで、見舞いくれて、壻にならせたい。私は自分の妻を忘れて、ここで再婚することはしない。餓死でも病死でも、その恩義を忘れない。私の妻はいくらでも幼い頃に父母の指定なので、不仁義の人になるわけがないだろう。

錢鎖児は病気のため、何太公の家で療養中になった。何太公は彼に自分の娘と結婚して欲しいが、彼は自分が既に妻がいるので、ここで再婚するのは不仁義だという理由で断つた。つまり、劉盼春、趙官保など夫のために貞節を守る節婦像のみならず、朱有墩はさらに周恭、錢鎖児のような妻のために貞節を守る義夫像も塑造している。これはつまり、朱有墩の考え方で、貞節を守るのは女性に対する一方的な要求であるのみならず、夫婦両方とも貞節を守り、夫婦の理を守る義務を有していることを示唆しているのではないかと考えられる。

以上を踏まえ、朱有墩は「夫婦の理を守る」、則ち貞節と「物欲の誘惑に打ち勝つ」ことという両者の間に、一種の直接的な関連を付けようとすることが見られる。則ち節婦たちが貞節を守れるのは、物欲を打ち勝ったためである。逆に言えば、女性には物欲を打ち勝てば貞節を守り、節婦になることができるようになる（男性も同じ）。

理を守れるかどうかは、物欲に對する態度だけで決まるのではない。

なつた。

ただし朱有燉の所で、この両者は「これでなければあれだ」というような対立關係になされている。第一節で述べた劉金兒は楚五との夫婦の理を失い、不貞な淫婦になるのは、高兼のお金の誘惑に負けたためである。また一方、劉盼春と趙官保はお金の誘惑に打ち勝つ

たからこそ、夫婦の理を保全し、節婦になつた。勿論、朱有燉は夫婦の感情という要素を完全に無視したのではなく、彼は周恭と劉盼春の愛、および趙官保の入隊した錢鎖兒に対する思慕も描いている。しかしこれと比べると、彼はやはり更に多くの筆舌を、盼春と官保

のお金持ちに対する拒絶に尽くしている。故に、感情的要素より、彼

はむしろこの二人の金に惹かれない品性に対する描写をさらに重視していると考えられる。このために、筆者は、物欲に心を動かさないことこそ、朱有燉の描かれた節婦像の最も重要な特徴であると考えられる。

えられる。

第三節 朱有燉「恋愛劇」の教化意味の再解読

さて、なぜ朱有燉はこのように節婦を描くだろうか。本節ではこの問題を明らかにし、恋愛劇の教化意味を捉え直すことを試みたい。これに関して、まず『香囊怨』の序における、次の段を見ていく。¹⁸⁾

三綱五常の理は、世間には絶滅していなかつた。唯人は物欲に覆われて、天理に悖るようになつて、此道を守れないよう

本論文では取り上げられなかつたが、同じく恋愛劇に属する『新編李亞仙花酒曲江池』の序にも同じ旨をさらに詳しく説明している。¹⁹⁾ 彼女は妾婦者だが、天理人心という混からずものも有している。人の性は元々善だが、習によつて遠くなり、善惡高下の区別も初めてあつたのは、物欲がこれを蔽つたからだ。

つまり朱有燉によれば、人間の本性は善である。そして、すべての善行もこの善なる本性から発したものである。逆にいえば、人間が様々な悪行を行つたのは、その本性が物欲に蔽われたためである。そこで、もし人が「善」を成就しようとすれば、まず自分の本性に立ち戻らなければならない。ただし、自分の本性に立ち戻るには、まず物欲の障りを解消しなければならない。

朱有燉のこのような考えの中には、朱子をはじめとする宋時代（九六〇年—一二七九年）儒学、特にその「理欲觀」の影響が見られる。理欲觀というのは宋の儒学者たちの、「天理」と「人欲」という二つの範疇の関係性に関する考え方である。程頤や朱子の所で、この両者は完全に、対抗的な関係になされている。これに関して、朱子は次のように述べている。²⁰⁾

明徳について聞く。(朱子が)曰く、これは即ち天に賦与された性というものだ。人皆はこの明徳を有している。ただ物欲の昏蔽のために、暗塞になつた。

明徳、或いは「性」は即ち人の善なる本性である。朱子によれば、人欲はこの本性を遮蔽する恐れがある。このために、本性を保全するには、まず人の物欲を退治しなければならない。朱子と同じように、朱有燉も天理と人欲との対抗的な関係を強調している、

人の性は、天に命じられるものだから、すべてが善だ。日用常行のすべてが至善の道に他ならない。これは私の本来の徳だ。外務は一旦侵入して、不善が生じる。ひとつのお不善が生じれば、これは一匹蠅の穢れの如く。二つの不善が生じれば、二匹の蠅の穢れの如く。不善は日々に生じれば、その善は日々に消える。善は日々消せば、私の本有の徳は、私の美にはなれないようになる。^{〔2〕}

「外務は一旦侵入して、不善が生じる」とは、心が外界に奪われて振り回されることで、不善なる物欲が生じることである。また太文字の部分から見れば、朱有燉が、物欲の不善は、人の本性の「善」と「両立できない関係性」を呈していると考えている。このために、

彼は道徳と欲望との関係性に関して、完全に朱子の理欲觀を受けて

いることが見える。

本節の冒頭で引用された、二つの恋愛劇の序から見ると、朱有燉は意識的に、女性の守節行為を善なる本性と物欲との対抗関係、則ち朱子学の理欲觀の枠組みの中で捉えている。従つて第二節で論じたように、彼の描かれた節婦の貞節が、物欲の誘惑に対する拒絶によって表れている。このために、これらの節婦像は、儒家の理欲觀を基づいて描かれ、これを表現するものだといえる。そこで、朱有燉の描かれた節婦たちはもはや、単なる夫のために貞節を守る模範女性像ではなく、これらの一々の人物像には、一つの更に普遍的な問い合わせが横たわっている。これは即ち、「人間は如何に物欲の障りを破つて先天の徳性に立ち戻るか」というのである。これに対して、朱有燉は第一節で言及した『慶朔堂』で「情欲はこのよう人に（の心）を動搖させる故に、（心は）ただ謹んでこれを防ぐべきだ」と答えている。^{〔2〕}つまり人の意識はいつでも謹んで警戒的な状態を保持すれば、欲の蝕みを防ぐことができる。そこで、彼の描いた節婦像の教化の意味は「夫のために貞節を守る」ことを宣揚するのみに留まるのではなく、彼はさらに、これらの具体的な節婦像を通して天理と人欲の対抗関係を示し、「人間は謹んでいる心で物欲の誘惑を防ぐべきだ」という旨を觀客に伝えることを求めている。

実際に、朱有燉が周恭や錢鎖兒など義夫像を描いた動機も、この意味上で理解できる。周恭は劉盼春の恩義を忘れずに一生独身で通すというのは、即ち未来に出る可能性がある誘惑に抵抗しつつ、劉

盼春との夫婦の理を守るのである。錢鎖兒の殉節は儒家の「舍生取義」に近いが、これも公的な理と私的な欲との対抗関係の体現である²⁴。彼はこれらの義夫像を描くのは、「謹んで防ぐべき」という教えは男女問わず、全ての人がこれを従うべきものだということを強調したいのである。

既にまえがきで言及しているように、今までの先行研究は往々にして、朱有燉の恋愛劇の教化意味を「女子が夫のために貞節を守ることを励ます」ことにあると簡単に見做している。しかし、以上の考察を踏まえて、筆者は朱有燉の恋愛劇には二重の教化の意味を有していると考えられる。これがまずは貞操という夫婦倫理を宣揚することであり、つぎは観客の物欲に対する警戒心（謹んで防ぐべき）を喚起することである。そして、第小節で既に論じられたように、朱有燉の作品において、諸家にはほぼ論じられていない後者こそ前者を成り立たせる前提である。

さて、我々は如何に朱有燉の「謹んで防ぐべきだ」という言葉を理解するのだろうか。現代に生きている我々にとって、これはただのありふれた話のような道徳訓戒であろう。しかし注意しなければならないのは、朱子学の文脈において、これはさらに深い意味を有している。先に述べたように、朱子は、固有の徳性、或いは天理に立ち戻るには、まず自身の物欲を退治しなければならないと考えている。その具体的な方法として、彼は「窮理」と「主敬」という二つの工夫（修養方法）を提示している。後者（主敬）に関して、宋時

代の儒学者に、はじめてこれを強調するのは程頤（一〇三三一一〇七）である。彼の考えでは、敬は「主」無適」、即ち意識が放逸せずに集中するという意味である。その後、敬の意味は彼の弟子たちによつて広げられ、また「常惺惺（心が常に覺醒）」（謝良佐）、「其心收敛不²⁵容一物（心は外部に惹かれずに収斂状態に保つ）」（尹焞）などの意味も加えられるようになった。朱子はこれらの思想を受け継ぎ、主敬を窮理のほかに、最も重要な工夫と見做している。ここで注目したいのは、朱子が「戒慎恐懼」という意味で主敬を論じているのである、

曾子に曰く、「戰々兢々、如臨深淵、如履薄冰」、これは即ち敬の方法だ。この心を保たないと、人は常に昏昧に墮ちているようになる。（例えば）今な誰かは寝ている中、身には痛みや痒みがあつたらすぐ起きる。そもそも、心はずつと動いているなら、自然に保てる。『中庸』における「戒謹恐懼」、これも敬という意味だ。

つまり、意識の緊張感（「戰々兢々」「戒謹恐懼」）を保つことを通して、心を昏睡に墮ちずに、常に覺醒する状態になることができる。これは即ち主敬の方法である。

そうであれば、心の覺醒と昏睡は如何なる意味だろうか。朱子の考えでは、人間は「性」と「氣」という二つの面によつて構成され

ては即ち本論で言う人間の善なる本來性であり、人間が人間になる本質である。これに對して、氣は人間の肉体を含む万物の形体を構成する質料である。彼によれば、人間の道徳意識は性によつて發するものである。そして、人間の欲張りは氣を源とする。人間のこの二元的な構造によつて、一つの心にも「道心」と「人心」という二つの面がある。道心は即ち性から發し、これを表現してゐる心である。人心は氣に發し、欲を求める心である。この両者は一つの心に屬するが、両者の間には一種の緊張感が存在している。もし人心は心を主宰し、道心を压制すれば、これは即ち朱子のいう心の「昏昧」状態であり。従つて人間は欲張りになる。逆にいえば、もし道心を心の主宰として確立し、人心を規制すれば、これは即ち心の覺醒状態である。そして、主敬工夫の効果は、道心を呼び起し、心を覺醒させ、これで物欲の蝕みを防ぐという点にある。そして、朱子が言つてゐる「戒慎恐懼」という主敬の内容、を朱有燉の「謹んで防ぐ」という言葉は同じく、意識上の謹む状態を意味している。朱有燉の朱子学背景に鑑みて、彼が言つてゐる「謹んで防ぐ」という言葉は、則ち朱子の主敬工夫である可能性が高いと考えなければならぬ。

以上を踏まえて、朱有燉の描かれた節婦像と義夫像が有している「謹んで防ぐべき」という教化意味は、尋常的な道徳の戒めではなく、これは更に儒家の主敬という工夫論的な意味を示していることが分かつた。つまり、節婦、義夫などのこれらの人像は朱子学における居敬工夫の具現化である。朱有燉が舞台上で、これらの人物を通じて、「謹んで防ぐべきだ」という旨を觀客に伝えるのは彼の目的である。そしてもし觀客が劇を觀て、この旨を肝に銘じ、日常生活においても常に謹んでいる心を持つて生きれば、これは即ち朱子の居敬工夫を実践している。

【鶴鳴天】書会の誰がこの雑劇を作つたのだろうか。南の節でも北の節でも、両方備わつてゐる。ただし、倫理に関わらないと、物語はいくら新しくても意味ないので。萬方から人々が樂しんでゐるこの太平な時代で、今夜でこの新しい作品を上演して、人の心を常に惕然させることは大事だ。

「人の心を常に惕然させる」というのは、即ち彼が設けたこの作品の教化的目標である。つまり、彼は觀客がこの劇を觀た後、心をいつでも謹んでいる状態に保つことを求めている。これは朱有燉の言う「謹んで防ぐ」という言葉と同じように、朱子学の居敬工夫である。これを踏まえ、朱子学の工夫論が明時代前期の演劇に与える影

響が広いことが見える。

結論と余説

以上の考察を踏まえ、本論文では次の二点の結論が出た。まず、朱有燉の描かれた節婦像は主に、「物欲に心を動かない」ことをその特徴とする。つぎに、これらの節婦像における教化意味は単なる「夫のために貞節を守る」ことを宣揚するのではなく、これは更に儒家の理欲觀、および朱子学の居敬工夫の具現化し、物欲の蝕みを「謹んで防ぐべきだ」と戒めるのである。

また一方、朱有燉の劇作品における人物像の工夫論的意味を指摘するのは、儒学が演劇の人物像の塑造に与える影響を一層深く理解することに資する。これだけではなく、これはまた次の問題を捉え直すことに資する。つまり、当時の演劇観において、教化を受ける観客は如何なる存在だろうかという点である。これに對して、先行研究は往々に、民衆に統治階級の意識形態を降り注ぎ、封建帝政の下の良民や順民にさせ、そこで統治の安定を固めることが目的である。この観点での民衆・観客はもはや圧制され、主体性が抹殺されている不完全な存在になつてゐる。ただし、本論文で述べたように、朱有燉、丘濬などの劇作家たちの目標は、舞台を借りて観客に朱子学の居敬工夫を具体的に展示し、これを実践させることにある。ここで留意しなければならないのは、儒学における工夫というのは、その最終的な目的は天地と合流し、超越的な意味を有している聖賢に

なるのである。これはつまり、劇の教化を受け、居敬工夫を日常に実践している観客たちは、個別的、限りのある存在を超えて、聖賢になる可能性がある。先行研究と比べると、かかる観客はまた積極的な意味上の、無限な潜在力を備わつてゐる「予備聖人」になつた。これを踏まえ、筆者は中国演劇論における観客の位置づけの複雜性を指摘するほか、儒家の「成聖（聖人になる）」という文脈の中で、中國演劇論における「観客」の性格を把握する可能性を示したい。

(1) 「全德—朱子学の視点からみた朱有燉の演劇教化觀」日本演劇学会全国大会、二〇二三年六月二十三日。

(2) 例えば一九五七年に、朱君毅氏と孔家氏は、「表面では男女の恋愛を諱えるものだが、實際には「人喰い」の封建道德（貞節）を宣揚するものである」と、朱の恋愛劇に強い非難を加えている。朱君毅、孔家「略談朱有燉雜劇的思想性」『光明日報』一九五七年、十二月一日。

(3) 趙曉紅「皇室貴族の伝統文化情結—朱有燉雜劇的現代解説—」『東方論壇』二〇〇三年第六期、二九頁。廖奔「論朱有燉」『中国戲曲学院學報』三十六卷第三期、二〇一五年八月、五頁。

(4) 廖奔「論朱有燉」『中国戲曲学院學報』三十六卷第三期、二〇一五年八月、五頁。

(5) これに關しては本論文の第二小節で詳しく説明する。

(6) 「口算着迎新送旧、全日凭着巴鑛為生」「巴鑛」は即ち利を貪るという意味である。『朱有燉集』齊魯書社、二〇一四年三月、三三七頁。

(7) 「妹子、你姐姐如今守着箇攢丁、十分艱難。近日偷留了這箇医人、十分有錢。你姐姐待嫁了他」『朱有燉集』齊魯書社、二〇一四年三月、三一三頁。

(8) 「今日賽廟處、有一火江西客人好生有錢、內中有箇姓徐、喚作徐福一、要來姪女兒家喫盞茶。此人內才外才、表裏相称、我料着高客敢也不來

了、不如留下這江西客人、搬上他船、跟他江西去了罷」『朱有燉集』齊魯書社、二〇一四年三月、三一七頁。

(9) 「我忍不住、一世忍不住、情願着人笑我、小觀我、憑着我那付淨嘴、哪裏不哄的些布使」『朱有燉集』齊魯書社、二〇一四年三月、三三五頁。

(10) 「甄家這弟子、這等不會貪錢、魏官人與他火炭般一塊黃金、他不肯接、也則是不見広、這金子少不得是我的」『朱有燉集』齊魯書社、二〇一四年三月、二六頁。

(11) 「姐姐、你好不会覓錢、過一日是一目的衣飯、常言道「漢子有似南來雁、去了一千有一万」、他每去了幾時、等的他來、俺即顧養漢來不妨」『朱有燉集』齊魯書社、二〇一四年三月、三一頁。

(12) 「【醉扶婦】空逗引蜂蝶意、枉約會燕鶯期。我從來做不慣迎新送旧的、又不比浪包要求食妓」『朱有燉集』齊魯書社、二〇一四年三月、二三九頁。

(13) 「我已半年來無点沈、怎肯兩廻家結婚姻。我說來的言語無私徇云々。」

『朱有燉集』齊魯書社、二〇一四年三月、二四七頁。

(14) 「【旦云】周恭、難得你這渾家、雖是染人、這等守志、你却休忘了恩義也。」『朱有燉集』齊魯書社、二〇一四年三月、二五〇頁。

(15) 「云々、【媒云】大姐我有一句話、敢勸你麼。」『旦云』王婆婆你試說咱。『媒云』你如今這般窮呵、何不尋箇衣飯處、揀箇官舍人。這城中少甚富的、改嫁一箇也罷。『旦云』這王婆兒、說的是甚話。『旦唱』一任我窮則窮甘心的受苦、你道他富則富我無心恋汝。『媒云』有那片舍十分生得俊美。『旦唱』一任他美則美我芳心不渝。『媒云』他更有戴的是燒手似金釵、喫的是爽口似綿羊肉、又有十數箱子打眼目的好新衣服、你休誤了這親事。『旦唱』便將着燒手般金鳳釵、便有那爽口的綿羊肉、更將着十數箱打眼目的衣服。『鵠踏枝』我其實不相爭、我心無半星無、一任你數黑論黃、我其實惡紫奪朱。『媒云』那片舍是宦官人家舍人、你肯嫁了他、久後便是夫人県君。『旦唱』我也無做夫人的分福、只甘心同萱堂奉養尊姑。」『朱有燉集』齊魯書社、二〇一四年三月、二五九頁。

(16) 「【淨云】小子姓張、片舍的便是小子。」『旦云』原來又是那廝云々、『淨

云』小子也有換套兒的衣服、揀口兒的食、小子家中十分富貴。『旦唱』

我也不恋你那換套衣、不囝你那揀口食、不愛你那家豪富。」『朱有燉集』齊魯書社、二〇一四年三月、二六三頁。

(17) 「【末抱病上、云】自從來口北操練、不覺過了二年半也。如今染得病

重了、多感何太公、早晚照顧、要將他女兒招我為婿、我想來、怎肯忘了我渾家、在此別繼姻親。便餓死病死了、也不肯忘恩負義。我家中渾家、終是父母配對、綰角夫妻、怎肯做箇不仁不義之徒。」『朱有燉集』齊魯書社、二〇一四年三月、二六五頁。

(18) 「三綱五常之理、在人世間未嘗泯絕、惟人之物欲交蔽、昧夫天理、故不能咸守此道也。」『朱有燉集』齊魯書社、二〇一四年三月、二三六頁。

(19) 「予乃嘆其雖為妾婦者、亦皆有天理人心之不可泯焉。人之性本善、因習而相遠、始有善惡高下之分、此物欲蔽之也。」『新編李亞仙花酒曲江池』『朱有燉集』齊魯書社、二〇一四年三月、七八頁。

(20) 『朱子語類彙校』上海古籍出版社、二〇一四年、三三三頁。

(21) 人之性、天所命之、皆善也。日用常行、無非至善之道、此吾本有之德也。外務一侵、不善長焉。長一不善、是一蠅之穢也。長二不善、是二蠅之穢也。不善日長、其善日消、善日消、是吾本有之德、亦不能為吾之美也。」『玉簪花說』『朱有燉集』齊魯書社、二〇一四年三月、七一〇頁。

(22) 「固知情欲之蕩人如此、唯當謹慎以防間之」『朱有燉集』齊魯書社、二〇一四年三月、十八頁。ここでは「情欲」だけを説いているが、儒家の思想において、美色に対する欲（情欲）は金などに対する欲と同じく、「物欲」や「人欲」として取り扱われている。儒家は様々な欲に対する退治法を示しているが、情欲や金欲などに対するそれぞれの退治を区別していない。このために、ここで「謹んで防ぐ」というのは情欲だけではなく、人欲全体の退治法と見做しても良いであろう。

(23) 白婆と周恭は「劉盼春の恩義を忘れず」という言葉に対して詳しく説明していないが、中国文学史に描かれている妻や恋人の恩義を忘れることでの「恩義を忘れず」という言葉この意味上で言うものであると

考えられる。

(24) 朱子学において、生存などの正常な生理欲求は簡単に人欲と見做されていない。しかし、この生理欲求は天理と衝突になる時、絶対的な

公なる天理の前で、これは私なる「人欲」に帰すしかない。このために、錢鎖児の殉節も天理と人欲との対抗の結果と見做しても間違っていないであろう。

(25) 「曾子曰く、「戰々兢々、如臨深淵、如履薄冰。」此乃敬之法。此心不存、則常昏矣。今人有昏睡者、遇身有痛痒則蹶然而醒、蓋心所不能已、則自不至於忘。中庸戒謹恐懼、皆敬之意。」『朱子語類彙校』、上海古籍出版社、二〇一四年、九六〇頁。

(26) 「【鷗鵝天】書会誰將雜劇編、南腔北調兩皆全。若於倫理無閼緊、縱是新奇不足伝。風日好、物華鮮、萬万人樂太平年。今宵搬演新編記。要使人心總惕然。」『新編中國古典戲曲論著集成明代編第一集』『歷代曲話彙編』、黃山書社、二〇〇九年、二二〇頁。

参考文献

- 朱君毅、孔家「略談朱有燉雜劇的思想性」『光明日報』一九五七年、十二月一日。
- 趙曉紅「皇室貴族的傳統文化情結——朱有燉雜劇的現代解讀」『東方論壇』二〇〇三年第六期、二九頁。
- 廖奔「論朱有燉」『中國戲曲學院學報』三十六卷第三期、二〇一五年八月、五頁。
- 『朱有燉集』、齊魯書社、二〇一四年三月。
- 『朱子語類彙校』、上海古籍出版社、二〇一四年。
- 「新編中國古典戲曲論著集成明代編第一集」『歷代曲話彙編』、黃山書社、二〇〇九年。